

国立国語研究所学術情報リポジトリ

研究所だより

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003066

五
月
七
日

0
1
1002



研究所だより

昭和二十五年
一月

國立國語研究所

東京都新宿区四谷霞丘明治神宮外苑繪画館内
(國電信濃町駅下車電話赤坂(48)〇三八九番)

任務と機構について

國立國語研究所が誕生を告げたのは、昭和二十三年十二月二十日の設置法公布であります。当時の文部次官井手氏が所長事務取扱として、総務課の陣容を整え、明治神宮当局の好意により絵画館の一階の一部四室を借用し、設備調度等創設事務が開始せられました。昭和二十四年一月三十一日付で所長が任命され、順次所員の発令を見、三月以降、毎週一回の所員会議を開いて、研究題目を決定し、研究部の機構を整えながら、調査研究に着手しました。

國立國語研究所に対する各方面の御期待は、ふたつの声となつてわたくしの耳に傳えられます。そのひとつは、「あわてるな、しつかり腰をすえてかれ。はたからしかられるくらい、ゆっくり今までやれ。」という声であります。これは、研究所の學術的責任を十分に果させようとする御期待によるものであります。もうひとつは、「ぐんぐんやれ、慎重にして出しおくれになつてはいけない。決定的な成果が出なくとも、中間報告でよい。たえず他に知らせ、その批判をうけながら、研究を進めるという行きかたにせよ。」といふ

声であります。これは、主として、研究所の社会的責任を果させようとする御期待に出るものであると思われます。

このふたつは、一般的の御期待であるばかりでなく、すでに、設置法第一條における目的の示しかたであります。設置法第一條は、研究所設置の目的を示したものであります。それによりましても、「國語及び國民の言語生活に関する科学的調査研究を行い」という目標と、「國語の合理化の確実な基礎を築くために」という目標が「あわせて」という接続詞で結びつけられています。が、いったいこの両目標の関係はどう考えたらよいでしょうか。「あわせて」ということばから推すと、前項が主で後項が副であるといえるでしょう。しかし、いま、この研究所が設置された社会的要請から考えますと、けつして、後項が副であるとはいつてしまえなものがあると思われます。むしろ、國語の合理化・能率化のために、設置の要があつたのだといつてもいいすぎではないでしょう。それならば、この、ふたつの目標は、いったいどう関連したらよいでしょうか。それは、ことばのうえだけの問題としないで、事実問題として考えれば、けつして別々な目標ではないことが明らかになると思います。

と申しますのは、いったい「科学的調査研究」にしましても、われわれの科学は、研究と実践の一貫によって築かれたものでなくなりません。

この研究所について申しますと、「國語及び國民の言語生活に関する科学的調査研究」が「國語の合理化の確実な基礎を築く」ということは、あくまで、「國語及び國民の言語生活に関する科学的調査研究」が不可欠の前提條件を成すものでなくなりません。

このように考えてきますと、ことばの関係はともかくとして、事実においては、まったく同じことを、ただ、両面からいっているにすぎないものとしなくてはならぬ関係であると思います。われわれの調査研究が、その実績において、こういう目標を、どこまで達し得るかは將来に待たなくてはなりませんが、その立てまえは、あくまで「科学的調査研究」の機関であり、それゆえに、「國語の合理化の確実な基礎を築く」機関でなくてはならぬと思います。この意味で、わたくしどもは、あくまで一つの目的に向かって、全員の努力を傾けてまいりたいと覺悟しています。

が、この一つの目的を達するためには、いくつかの課題を設定し協力して、その課題の解決に当らなくてはなりません。ただいまでは大体、つぎのような研究機構をもつて出発いたしております。

第一部 現代語の調査研究（部長岩淵悦太郎）
第一研究室 東京および各地における話し言葉の調査研究（主任中村通夫）

第二研究室 共通語に関する調査研究—書き言葉の実態調査（主任林大）

資料室（主任高橋一夫）

第二部 國語問題および國語教育に関する調査研究（部長浅井惠倫）

第三研究室 國語の学力標準設定に関する調査研究（主任興水実）

第四研究室 國語學習指導の改善に関する調査研究（主任平井昌夫）

第五研究室 國字の能率に関する調査研究（主任草島時介）

第六研究室 新聞用語・放送用語の効果に関する調査研究（主任浅井惠倫）

第三部 國語の歴史的発達に関する調査研究（予算の関係上、まだ設置していません。準備として資料を集めています。）

成果としては、標準語の確立を目指し、それによって國語國字問題解決の科学的基礎資料を作成することになります。しかし、その完成には、現状では、相当な日子を要することと思いますので、それまでは、年報その他によって中間報告をし、整理された資料の公表をしてまいりたいと考えています。

現状はこのようありますが、経験と反省によつて、たえず改善を加え、目的達成につとめてまいりたいと思つています。どうか文化日本建設の基礎條件を確定するために、細大となく御忠言と御協力をお願い申しあげます。

（西尾 実）

各研究室から

第一研究室

言語は、その土地や環境と密接な関係があり、土地や環境の違いによつて、同じ日本語でもりながら多少ずつ違つています。土地や環境と関連させて言語を取り扱おうとするのが第一研究室の仕事であります。簡単に言えば、方言に関する調査研究ですが、それとともに方言的地盤の上に共通語がどのように行わされているか、共通語がどのように影響を及ぼしてその結果その土地の言語がどのように変化しつつあるかを見ようとしています。

会を利用して、調査をおこないました。この總理庁主催の調査は、四谷稅務署管内の營業ならびに庶業所得稅を納めていて、各種の組合に属している四千人の中から、職業別にシステムティックサンプリングによつてえた四〇〇人と、右の稅を納めていて組合には属していない人々からえた二〇〇人と、あわせて六〇〇人を大藏省高等財務講習所に集めておこなおうとしたのですが、實際に出席して調査をうけたものは二〇〇人たらずであり、われわれの計画した調査に關しても、回収した調査票の数は一四七でありました。

この時の調査は、東京方言の実態調査の準備調査としておこなつたもので、調査の方法および技術の検討・訓練、とともに被調査者を集めて集団調査をおこなう場合の調査状況を観察することに重点を

との調査に引きつづいて、第一回の調査をおこないました。これは前回の調査によつて得た結論と反省を考慮しつつ「東京方言を調査するにはいくつかの地域的な層（ストラーダ）に分けておこなう必要があるかどうか」に関する基礎的な問題を検討することを直接の目的としました。

東京といふ地域におこなわれてゐる言語として東京語を調査しますが、この東京語は共通語の基盤となつてゐるものですから、その意味でも重要な研究対象と言えます。また各地の言語についても、従来の研究の成果を收集整理するとともに新たな観点に立つて研究する予定であります。昭和二十四年度は研究の第一年度でありますから、地域や環境と関連している言語についての調査方法を確立することと、研究室員が現地調査の経験を積むとともに主眼点をおきました。

東京方言の実態調査

東京方言の実態調査としては、まず手初めとして、総理庁が主催して四月十九日に「税金申告書の理解程度」の調査をおこなった機

第一回の調査結果と第二回の調査結果の一部とは、すでに整理を終り、いまその他の部分の整理をつづけています。

八丈島の言語調査

昭和二十四年六月二十八日から七月十二日にわたって、八丈島において言語調査を試みました。これは第一研究室が東京以外の地域でおこなった最初の現地調査であります。

この調査はおもに、地方の言語を調査する場合の方法の検討と研究室員の調査技術の訓練とを目指しておこないました。

なぜ八丈島を選んだかと言いますと、その理由はつぎのとおりであります。

1 八丈島は生態学的條件が比較的單純であり、その上、島だけで独立の生活体をなしているので、「共通語を話す度合」の調査をはじめておこなうにはきわめて扱いやすく、今後の調査のために役立つ資料と経験とを得ることができる地点であること（白河市では同じ課題を同じ方法で調べました）

2 八丈島の五つの村は、音韻の点についても、文法の点についても、また語の点についてもかなり違っているので、「言語の地域的な違い」ということを調査するのに八丈島は適当な地点であること

3 八丈島の言語は、従来の報告によると、かなり特殊な構造をもつており、「言語そのものも、系統不明」として残されているので、言語それじんとしても調査に価する言語であること

4 八丈島の言語については江戸時代から比較的多くの報告があ

るので、八丈島の言語を歴史的にたどることもできる

5 従来の報告では不明な点もあり、不確かな点もあるので、これらを補い正すことができる

以上の、八丈島を調査地点に選んだ理由は、そのまま調査の課題に関連しますが、そのうちでもとくに力を入れて調べようとしたことは次の二つであります。

(1) 共通語を話す度合を決定する諸要因はなんであるか

(2) 五つの村は言語的、社会的にいかに違うか

さて、以上の課題をどのように調べたかと言いますと、まず八丈島へでかける前に、準備と事前調査とをおこないました。つまり、昭和二十四年五月十一日から約一ヶ月にわたって八丈島に関する文献三十五種類から言語に関する事項を全部集めて、調査項目を作成しました。その上で、東京都在住の八丈島出身者、延べ十五人について事前調査をおこない、調査票を作る準備をしました。

現地ではつぎのような方法で調査しました。まず、つぎの項目を盛った調査票を作り、面接によって全島二百十六人の成人男女（十才以上）について調べました。(1) 共通語を話す度合に影響を及ぼすと考えられる、個人の社会環境 (2) 同じく、コミュニケーションの状況 (3) 共通語に対する態度および意見 (4) 言語構造的特長について (5) 共通語を使っているか、方言を使っているか (6) 外来者との初対面の際に話す共通語の度合の判定

調べられた二百十六人は、全島一万二千四百八十人（昭和二十四年六月一日現在。十三才以下をふくむ）から、村ごとに、無作為にサンプルされたもので、これらの人々の結果をもつて八丈島全体の状

況を高い信頼度で推測できるような計画のもとに選ばれておりま

りますが、これは、そのような共通語の規範意識を明らかにしたものです。

言語それじしんとしても調査に価する言語であること

4 八丈島の言語については江戸時代から比較的多くの報告があ

調へられた二百十六人は全島一万一千四百八十人(昭和二十四年六月一日現在。十三才以下をふくむ)から、村ごとに、無作為にサンプルされたもので、これらの人々の結果をもつて八丈島全体の状

況を高い信頼度で推測できるような計画のもとに選ばれております。

以上の調査によって明らかになるおもなことは、共通語を話す度合を決定する諸要因はなにかということです。

現地でおこなつたもう一つの調査は、特定の個人を選び、従来の「方言調査」の方法によって、言語構造をできるだけ詳しく調べたことあります。従来の方法よりも一層科学的であるようにと心がけました。

八丈島の言語調査のおもな部分はひとくちに言えば「方言調査」ですが、もつと厳密に言えば、「方言の社会調査」ということができます。方言の実態を明らかにするためにはいろいろな方法がとられなければなりませんが、こんどのような方法も重要な科学的方法の一つと考えられます。

成果は現在とりまとめ中であります。昭和二十五年二月中には報告をまとめ、三月中には報告書を発表できる予定であります。

この調査には長野県から派遣された研究生の青木千代吉氏および統計数理研究所所員の丸山文行氏も参加しました。(中村通夫)

第二研究室

第二研究室は「共通語の実態調査および研究」を担当しています。ここで共通語というのは、現代において、日本全國に通ずる言語という意識で、やりとりされている言語のことであります。たとえば、日常、新聞・ラジオ等に用いられている言語がそれであります。この共通語と同じように用いられるものに標準語という語があ

りますが、これは、そのような共通語の規範意識を明らかにしたものの、すなわち規範として制定された共通語であるといつてよいかと思ひます。

この研究室は、こういう意味の共通語の実態を明らかにし、規範の確立に資するために、音韻・文法・語い・文型・文体・表記法等の部門に分けて調査を進めることにしましたが、まず書き言葉における共通語を取り上げ将来、話し言葉に及ぶつもりであります。

今年度の調査研究にあたつては、文法・文型・語い・表記法の四部門について、それぞれの担当者を定めて着手しました。これらの部門は、相互に入り組んだ関係にありますので、各研究員は、おのとの分担について、的確な研究調査の方法を確立することに努めるとともに、相互批判の機会を多く持ち、相互の研究を関連させて共同研究として進めようとしています。材料をカードにとつて整理するため、目下八人の臨時筆生がこの研究室に所属していますが、これら筆生の訓練をもかねて、研究員の研究発表や講義を、つぎのようにおこなつてきました。

六月二十八日 研究所の任務と第二研究室のしごと

七月十二日	終戦後の國語政策(一)	林 賢
八月十日	資材構成論	水谷 静夫
九月二十七日	終戦後の國語政策(二)	林 大
十月四日	文法とは	永野 賢
十月十八日	文論	宇野 義方
十月十八日	文節について	林 大

十月二十五日	單語論	水谷 靜夫
十一月八日	表記法について	水谷 靜夫
十一月廿五日	用言について	斎賀 秀夫
十二月六日	送りがなについて	大野彌穂子
十二月十六日	辞について	永野 賢

科書などについて調査中であります。なお研究の焦点を「語の表記法」におき、用字法・文表記法・文章表記法などとは一応区別しています。

(林 大)

資 料 室

文 法 現代口語の文法はんちゅうを究め、文法体系を明らかにするための調査をおこなっています。対象を、書き言葉・会話文・話し言葉に分け、まず、書き言葉の資料として、戦後の新聞・雑誌から、主として助詞・助動詞をカードにとり、その分類を試みています。また、会話文についても、單語を単位としてカードを採集しております。品詞分類論については、根本的な検討を加えたいと思っています。

文 型 文型に関する従来の研究資料を収集整理し、あわせて外

國語のセンテンス・パタンを参考しつつ、戦後の新聞・雑誌・教科

書などから、文を単位としてカードをとり、その整理方法を考究しています。

語 い

従来の語い調査の資料を収集整理し、その対象・資料・

方法に検討を加えるとともに、実際に語いの採集を試みています。今年度の仕事としては、おとのの了解語とみなしえるものとしての一新聞の本文における一定期間の用語について、全体の範囲・組成・各語の使用度数などを見たいと思っています。

表記法

現代の漢字かな交り文における表記がどんな変遷をしてきたかについて調査しています。まず明治初年ごろの資料について一つの方法を吟味し、ついで今は、主として戦後の新聞・雑誌・教

資料室の仕事としては、(イ) 資料図書の整備管理、(ロ) 國語言語関係文献目録の作成、(ハ) 國語言語関係研究機関および研究者の調査、(ニ) 資料文献の複写に関する事務、(ホ) 所外の人の研究資料利用に関する事務などがあげられます。このうち(ロ)として、山田房一氏に委託した調査に基いて、「國語言語関係刊行書目」「昭和十七年一月から終戦時までと、戦後二十四年五月までと」を謄写印刷に附して、所内および関係者に配布しました。(ハ)は一部狭い範囲についてでは進行中であります。

資料の受入れについては、

(1) 図書 開所から二十四年三月まで九十九点(二千六百十三冊)

二十四年六月まで千百四十三点(二千二百二十五冊)

二十四年九月まで千百八十点(千百八十冊)

(2) 雑誌 研究誌と調査資料としての一般誌と合わせて毎月約四十五種購入しています。ほかに数カ所から寄贈を受けています。

文献の収集については、まず基礎的なものから集めようとしました。辞典類などは相当よく集まっていると言つてよいかと思います。また方言関係のものとして東條操氏・大田栄太郎氏の藏書が合わせて約千三百点入ったので方言の文献としては相当集まっている

と言えるかと思います。なお、これらについては近く目録を作りました

新「ローマ」字國ノ近況ト日本ノ左横書

井上 達二氏

武藏 要氏

福島県棚倉町方言集

表記法 現代の漢字かな交り文における表記がどんな変遷をしてきたかについて調査しています。まず明治初年ごろの資料について一つの方法を吟味し、ついで今は、主として戦後の新聞・雑誌・教

と言えるかと思います。なお、これらについては近く目録を作りたいと思っています。

言語政策に関する文献としては、保科孝一氏が滞欧中に集められたものが入っています。小冊子が多いのですが、またそれだけになかなか得がたいものがあります。主としてドイツ関係のもので、約百二十点あります。

文献の收集については、各方面から支援をいただいていますが、寄贈を受けた研究機関や団体のおもなものはつぎの通りです。

日本放送協会・アメリカ方言協会・言語文化研究所・東京大学附属図書館・天理大学・群馬國語文化研究所・語学教育研究所・特許庁・文部省・國語学会・放送文化研究所・新日本教育文化

研究所・日本ローマ字会・穂波出版社・國語文化学会・カナモジカイ・全國書房・弘文堂書房・京都大学國語學國文學研究室・國語をよくする会・ローマ字教育会・日本文芸研究会・教育図書株式会社・三省堂・朝日新聞用語委員室（順不同）

また個人の著者、編者から寄贈されたものは、

正しく 美しい ことばの生活を求めて

—私の方言研究ノート—

江渡益太郎氏

あそびのうたことば第一集

TOKI WA UTURU

信州方言読本

日本魚名集覽 第三部

國家語の問題について

晋の文化史

江渡益太郎氏
田中館愛橋氏
青木千代吉氏
濱沢 敬三氏
保科 孝一氏
田口卯三郎氏

第三研究室で着手している仕事は、つぎの四つであります。

(1) 漢字・漢語に関する調査研究：新聞に出て来る漢語および当用漢字採用によって現われた「かな書き漢語」をカードにとっています。「かな書き漢語」の方は本年三月で一応終り、一般漢語の方は来年度も続ける予定であります。

(2) 命名法の調査研究：(a) 当用漢字制定以後の人名のつけかたについて調査するためにカードにとっています。これは本年三月に終ります。

(b) 動植物名・商品名等を收集し、カードにとっています。そうしてこれを分類・整理して事物の命名法を研究しようとしています。

(3) 一学年一二学年読解力に関する標準テストの作成：小学校・中学校・高等学校の児童・生徒の國語能力を問題の形式で表示するいわゆる標準テストを作成しようとし、その中でまず第一に

新「ローマ」字國ノ近況ト日本ノ左横書 井上 達二氏

福島県棚倉町方言集

武藏 要氏

山陰方言の語法

廣島方言の二三の特徴

原田 英雄氏

廣戸 悅氏

資料の收集整備は、研究所としてもつとも大切な事業の一つであります。しかし、地方や個人の出版物はなかなか分らぬことも多く、入手困難なので、著者に限らず研究者各位に御教示をとくにお願いしたいと思います。

（高橋一夫）

第三研究室

読解力について、今年度と本年度とで一応完成しようとしています。そのため、まず実際家と研究者とから成る「テスト問題作成委員会」を設け、各地に「協力学校」をお願いして、今日までに二回テストをおこないました。その第一次テストは昭和二十四年六月末施行、被調査者計一万名、考查結果についてはプリントを作成し、所内には報告ずみであります。

第二次テストは昭和二十四年十一月末施行、被調査者計二万五千名で、この結果整理は一月中に完成の予定であります。

(4) 一学年一十二学年語い尺度の作成：読解力テストのつぎに「語い尺度」を作成しようとして、同じ委員会によって一年から十二年までの各学年について、学年ごとに百語を選んでもらい、これを協力学校によつてテストし、この結果によつて学年別語い尺度を作りたいと思っています。これも二年計画であります。

(興水 実)

第四研究室

第四研究室は國語教育を主として取扱いますが、國立國語研究所の性格上、國語の合理化の確実な基礎を築くことと関連させて、國語教育の調査研究をしようとしています。

(1) 教育内容の調査：暫定的な学習基本語い表・源泉單元表を作成するための準備調査と、國語カリキュラムについての基礎的調査とをはじめています。

(2) 学習指導方法の改善に関する研究：これは諸項目にわたつて実験協力学校と連絡して着手しています。

(3) 学習負担軽減：ローマ字を用いることにより、児童の國語学習の負担がどれほど軽減されるかの実験的研究を目指し、その立案をしています。

(4) 学業不振児の原因と治療：これについては原因の分析をはじめています。

(5) 学力標準に関する調査：このうち標準テストの作成については第三研究室が全面的に取り上げています。第四研究室では評価体系の確立についての研究をすすめています。

(6) 國語教育研究文献解題：さしあたり終戦後にあらわれた文献のリストを作成しています。

(7) 外國の國語教育の調査：第一にアメリカの國語教育の調査を文献に基いて、はじめています。

(8) 研究者の養成：県外派遣教諭の受入れをしています。現在八県・八名に及んでいます。研究会については、小学校部会と中高

部会とにわけて毎月一回あて開いています(別項参照)。研究所主催の講習会はまだ開いていませんが、所員が講師として各地の講習会に出席しています。現在まで約四十回出席し、地域は東京・千葉・群馬・茨城・長野・福井・新潟・山梨・大分・福岡・長崎・山形・福島の十三都県にわたっています。

(9) 実験協力学校：昭和二十四年十一月三十日現在の実験協力学校はつぎの通りであります。

久原小学校、杉並第四小学校、杉並第七小学校、原町小学校、育

(1) 教育内容の調査・書定的な学習基本調査表・源泉單元表を作成するための準備調査と、國語カリキュラムについての基礎的調査とをはじめています。

(9) 実験協力学校：昭和二十四年十一月三十日現在の実験協力学校はつぎの通りであります。

久原小学校、杉並第四小学校、杉並第七小学校、原町小学校、育

英小学校、深沢小学校

落合中学校、足立第一中学校、目黒第八中学校

都立赤城台高等学校、都立第五高等学校、都立第十高等学校。

(平井昌夫)

第五研究室

第五研究室では読書における眼球運動の実験をおこなっています。読書における知覚の世界において、よく読まれるためには、すなわち、よりよき体制を得んがためには、よりよき力がはたらかなくてはなりません。身体器官の調節、たとえば、眼球における調節共やく運動のごときは、それであり、器官のよき発達、適応は刺戟の異質的分節に必要であり、また逆によく異質的に分節された刺戟は、眼球の調節、共やく等の運動を軽減し、また、異質的に分節あしき刺戟は、眼球の調節、共やく等の運動を加重するといえるのであります。

ここまで考えてくると、横書き、縦書きのいづれがよいかの問題は、刺戟をよく分節せしめるものは、横、縦、いづれかということになってしまいます。さらにいいかえると、一方の極である刺戟布置の工合をいろいろにして、それに直接にかかり合う身体器官、ことに眼球 Lens の調節、あるいは共やく運動は、どんな場合に軽減され、どんな場合に加重されるかを考えなくてはならなくなってしまいます。ここに眼球の停留・運動等の問題がはつきり登場してくるのであります。

停留・運動が頻発し、調節や共やく(輻湊や分散)に労苦を要する

読書は、その刺戟の異質的分節化あしく、その労苦の少い読書は、異質的分節化に都合がよいことになります。

五研が横読み、縦読みの優劣を決するにあたり、あえて読書における眼球の停留・運動にまで掘り下げたゆえんはここにあるのあります。

読書における停留・運動は、たゞの観察によつて、わかるものではありません。また、秒時計で読書時間を測つたのでは過程は全然分らず、ただ一定量の読書の速さしかわからないのです。読書における、とくに眼球の停留・運動を客観的に記録せねばならないことがあります。

眼球は、読書にあたり、両眼は協力して対応しつつある点を凝視しては、近在を同時的に知覚し、ほぼ行にそつて、つぎつぎへ飛躍しつつ、これを繰返しているのであります。その際、両眼はある軸の周囲を中心とする廻転運動をしています。また、同時に、六個の動眼筋は、antagonistisch(拮抗的)に函数的に協動して、上下、左右、前後、旋廻等のあらゆる雑方向に、運動を行つてますが、最初の廻転運動が、その主要な運動であるところから、しばらく他を捨象し、これのみを抽象した線に翻訳して、見ようとするものであります。これは Fovea Centralis(中央小窓)に明瞭な像を結びながら、凝視点近在のみを知覚する凝視停留が、つぎつぎへと反射的に結ばれてなされる眼球の運動を、單に、一方に向のみ翻訳して記録するのであります。

もとより健康の眼は、石炭殻の一粒の存在をすら、許しません。

そのためこの読書における停留や運動の記録は、最近年発明された

自由に動く義眼を用いて、健康眼の停留・運動を類推して作るのであります。義眼とはいえ、網膜その他の狹義の視官は壊れても、眼球に附属する六個の動眼筋か、健在するかぎり、これが著しく退化していなければ、左右両眼が完全に対応し、共やく運動をすることが嚴然たる生理的事実たりとの想定のもとになされるのであります。

（草島時介）

第六研究室

第六研究室は、「マス・コムニケーションにおける言語」の調査研究と「國語辞典の編集方法に関する調査研究」とを担当しています。

「マス・コムニケーションにおける言語」の調査研究については、今までほとんど調査研究がおこなわれていなかつた問題であるだけに着手に困難をきわめました。外國文献をさがしても資料がとぼしく、そのため方法に苦労は並大抵ではありません。東大附置新聞研究所・放送協会放送上の手がかりを得る文化研究所その他の関係諸機関の協力を得て、この調査研究を築いていこうとしています。さしあたって「新聞・放送における言語」を研究の対象として、新聞・放送用語を研究するための基礎的調査をおこない、用語研究の手がかりを得ることを本年度の目標としています。

まず、新聞については、新聞用語研究の基礎的な諸調査をおこなうこととし、新聞研究所との連絡会議を開き、つぎの事項を調査することに決定しました。

- (1) 新聞默読平均時間の測定
- (2) 平均時間内の知覚試験
- (3) 見出し発見速度の測定

いま、調査の問題・方法につき準備中であります。

放送については、日本放送協会放送文化研究所に協力を願い、放送用語の基礎的諸調査をおこなう予定で、その第一着手として、全國における放送受信機の型と性能との調査をはじめ、各方面にわたる調査を、放送文化研究所に依頼しています。この結果を手がかりとして第二次調査を実施する予定であります。

「國語辞典の編集方法に関する調査研究」については、その手がかりとして、國內における既刊の國語辞典の編集方針、方法等を知るために、大言海・言泉・大日本國語辞典の三種をえらび、そのあみ方、あり方の諸調査、すなわち

- (1) 各辞典編集上の主旨・目的・方法などを知るよすがとなる凡例をはじめとし、つぎに各語についての記載形式ならびに解釋法などを知るため、各品詞につき計十五の重要な語を選択し、それらの語の記載にもとづいた長短の比較検討
- (2) その他の辞書をも参照し、さらに形容詞・副詞・動詞の中問題となる語についての記載や、接続詞・接頭語・接尾語・熟語名詞・熟語動詞・句・外来語などのうちとくに注意を要する語の記載法
- (3) 辞書に用いる活字・略語および記号の調査
- (4) 各辞書における語数の調査
- (5) 各種の國語辞書中、あ行音部に出ている挿画の調査

右の諸項目について調査した資料に加えて、諸大家の辞書編集に関する文献を参考とし、また一方外國辞書としては、オクスフォード英語辞書(N·E·D)およびウェブスター辞書の編集方法に関する

研究所の創設とともに、総務課を設け、その中に、庶務係・会計係をおき、課長に齋藤正、係長にそれぞれ、井上繁・宮沢幹郎が任命されました。創設から約半年の間、庶務係においては、人員の充

うこととし、新聞研究所との連絡会議を開き、つぎの事項を調査することに決定しました。

イ、默読による読み能力の測定

右の諸項目について調査した資料に加えて、諸大家の辞書編集に関する文献を参考とし、また一方外國辞書としては、オクスフォード英語辞書（N・E・D）およびウェブスター辞書の編集方法に関する文献による資料などにもとづいて、ひとまず帰納したところの「現代語辞書の読み方あり方」を

(1) 資料・語の収集範囲・見出し語の定め方

(2) 編集・A 正字法・用法・解説・語源・引用

B 配列法・その他

(3) 印刷：諸活字の適用・辞書の体裁・その他の三項目にまとめたものを、去る九月二十二日所員会議の際、一応一段階としてその報告を終りました。

なお、引きつづき第二段の調査研究として

(1) 辞苑・言林両辞書におけるラ行音に属する外来語の調査と、その検討

(2) 大日本國語辞典に採録されている動・植物名（一部）の調査と、その検討

の二題目につき、目下調査継続中、今年度内には完成の予定であります。

（浅井惠倫）

事務室から

研究所の事務機構の仕事は、研究所全般の運営管理について所長を補佐する面の仕事と、直接研究部門のおこなう研究活動に対するサービスとの二つに分れると思います。

一一

（齋藤 正）

半年経つてそれが整つてくると、こんどは、研究部門の活動が活発になつて來ているので、その状勢に即応するよう、事務機構の改革をおこない、庶務部を設け、その中に会計課・庶務課・編集課などをおくことになり、またひとつ崙にさしかかりました。編集課は年報その他、研究成果を公表してゆく重要な仕事で、直接研究活動とのつながりが深いので、この課の編成は、慎重を要するわけで、いま進行中であります。

新しい研究所が新しい仕事をはじめてゆくためには、事務の面においても、つぎつぎに前例のない場面にありますので、創意と工夫とを傾けて、研究所のしっかりした土台を組み立てるよう努力したいと思つています。

- (3) 辞書に用いる活字・略語および記号の調査
(4) 各辞書における語数の調査
(5) 各種の國語辞書中、あ行音部に出ている挿画の調査

特定地点の言語生活調査

一、目的

國民の言語生活の実状を総合的科学的に把握するために、特定地点を選び、そこにおこなわれる言語の全貌を社会環境との関連において捕え、それによって、社会生活を営む上に支障となつてゐる言語生活上の諸條件を明らかにして、社会生活の合理化、能率化をはかるうというのが本調査の目的であります。

二、組織

文部省科学試験研究費補助金の交付を受けて、國立國語研究所が中心となり、統計數理研究所・民俗学研究所と共同して調査研究をおこないました。三研究所の代表者から成る調査委員会で計画を審議し、三研究所の所員をもつて調査班を編成し、調査を実施しました。なお調査の現地においては、その地の学校教員、市役所吏員等の助力を受けました。

三、調査地点

特定地点として福島県白河市を選定しました。白河市を選んだ理由はつぎのとおりであります。

- (1) 農村地帯の一中心をなす都市であること(こういう都市はわが國にもつとも普通に見られる)
- (2) 調査に適当した人口(あまり大きくもなくまたあまり小さくもない)を持っていること
- (3) その地の言語が、共通語と区別がつかないほど類似していない

- こと
- (4) その地の言語が調査者にとって了解できないほど変つていないこと
 - (5) 東京からの往復が比較的簡単であること

白河市は都市的性格を持つものですから、これと対比する意味で、その周辺の農村中から、五箇村・金山村を選びました。

四、調査の時期

つぎの三回にわけて現地で調査をおこないました。

- (一) 下調査 昭和二十四年十月三日から十一日まで
- (二) 前調査 同年十一月四日から十日まで
- (三) 本調査 同年十二月二日から十一日まで

五、調査の課題と方法

(1) 共通語を話す度合

談話においてどれほど共通語がおこなわれてゐるか、またその共通語化の原因過程はどうかを探るために、調査地点の在住者(十五才から六十九才まで)から層化無作為抽出法によつて、白河市五百人、五箇村八十四人、金山村百人を選び、その一人一人についてつぎの項目に關して、戸別訪問による面接調査をおこないました。

その個人の社会環境、社会的態度、コミュニケーション、言語上の特長(音韻・語彙・文法)、共通語化の判定、新語、共通語に対する意見・態度、場面による共通語と方言との使いわけ

実際に調査し得た人数はつぎのとおりで、多少の調査不能者を出した。これは、轉住・病氣・長期出張等の理由によるものであります。

(調査)

(調査したもの) (調査不能のもの)

記録させたのです。

白河市 五〇〇人

四八六人(九七・二%) 一四人(二・八%)

七八人(九二・九%) 六人(七・一%)

(口) 調査班員自身がつぎの四人の市民について、一日中附つきりでその言語生活のありさまを観察記録しました。

(2) 調査に適当した人口（あまり大きくもまたあまり小さくもない）を持つてること

(3) その地の言語が、共通語と区別がつかないほど類似していない

対する意見・態度、場面による共通語と方言との使いわけ実際に調査し得た人数はつぎのとおりで、多少の調査不能者を出した。これは、轉住・病氣・長期出張等の理由によるものであります。

(調査)
(予定者)
(調査したもの)
(調査不能のもの)

白河市	五〇〇人	四八六人(九七・二%)	一四人(二・八%)
五箇村	八四人	七八人(九一・九%)	六人(七・一%)
金山村	一〇〇人	八五人(八五%)	一五人(一五%)

文字で書いたものは一般に、共通語と言つてよいのですが、それらに方言の影響があるかないかを知るために、地方新聞の記事、市役所等からの告知、掲示・看板・立て札・店先の商品名等を収集しました。(昭和二十四年十月から十二月初旬までに現われたもの)

(2) 言語生活と読み・書き・聞く能力

面接調査の被調査者として白河市から選ばれた五百人のうちから、さらに百人を層化無作為抽出法によつて選び出し、市内の二箇所の調査場に集めて、つぎの項目について調査しました。

音声言語の聞きとり、文字言語の読みとり、ローマ字の読みとりおよび書きとり、漢字・電文の書きとり

実際に調査場に出席したのは、百人中六十三人でした。

なお、これらの人については、新聞・ラジオの利用度、手紙を書いたり電話をかけたりする機会がどれほどあるか等に関する言語生活の調査を行いました。

(3) 二十四時間の言語生活

特定の一日において、話す、聞く、読む、書くの言語生活をどのようにおこなつてゐるかを知るために、

(イ) 白河市在住の学校生徒（中学校三年生・高等学校一年生）

二百五十人に依頼して、その両親のいづれかについて調査させました。時刻、時間、場面との関連において、その言語生活を観察

記録させたのです。

(ロ) 調査班員自身がつぎの四人の市民について、一日中附つきりでその言語生活のありさまを観察記録しました。

- 一、理髪店主（男、四十五才）
- 二、市役所吏員（男、五十七才）
- 三、農家の主人（男、五十一才）
- 四、家庭の主婦（女、四十九才）

(4) 疎開児童・生徒の言語

戦時中の特殊現象として、各地に集団移住がおこなわれましたが、その人々が、新しい居住地に住みついてから後、どれほどもとの言語を保持し、どれほど新居住地の言語に同化したかを明らかにするために、疎開児童・生徒の言語を観察することにしました。白河市に現在住んでいる疎開児童・生徒であつて京浜地区から直接にするために、疎開したものはおよそ五百人（小学校一年から高等学校三年まで）あります。その一人一人について、アクセント・音韻にして調査し、保存・同化と家庭や学校の環境との関係、轉住した年令との関係を明らかにしようとしました。

(5) 言語環境

白河市および五箇村、金山村の言語が方言的にどのような位置を占めているかを正確にとらえるために、以上の地点はもちろん、白河市周辺の村々（関平・川崎・古関・小田川・西郷・白坂）について調査班員が現地の適当な個人をとらえてその言語を観察しました。なお白河市を中心として交通路線上の主要地点四十二箇所（福島県下四十箇所・栃木県下二箇所）を選び、その地点に地方調査員を

れき、その地の言語について詳細な記録を作る事を委託してあります。

(6) 社全環境

白河市および五箇村・金山村の地理的・歴史的・経済的・政治的環境や婚姻・習俗・行商等からみた白河市を中心としてのコミュニケーション等を知るために、旧家、古老、商店主等から話を聞き、また市役所・役場・地方法務局・学校等に收藏する文書を用いて調査しました。

成果については、現に銳意とりまとめ中ですが、五月中に報告書を作成し、九月には発表する予定であります。（岩淵悅太郎）

雜志

評議員會

この研究所の評議員会は、これまで、いろいろの機関に設けられて、いた評議員会等とちがつて、形の上からも、実際の活動の点から見ても、はつきりした任務をもつております。

研究所に評議員会が設けられた主旨については、研究所の設置法案が國会に提出された際の文部大臣の提案理由説明につきのよう�述べられております。

「この研究所の運営については、評議員会を設けて、その研究が教
育界・学界その他社会各方面から孤立することを防ぐとともに、研

所の研究計画、委託研究等について、活発な審議を行い、所長に対
して、有益な助言をしております。
(斎藤幹事)

(斎藤幹事)

四

究所の健全にして民主的運営をはかるようになります。
評議員の定員は二十人で、昨年二月四日次の十九人の方が発令され、現在、一人だけ発令を見ておりません。

次
久
藤
正
匡
崎
安
山
長
會
副
會
長

瑞後藤崎藤
宗正匡正
臣德輔次

石田一
武四京

汎 颯
登 田
哲 琴

善光貞

三 誠

古 服 中
垣 部 島
鉄 四 健

柳 松
田 坂
國 忠
男 則

昨年二月二十日、第一回の常会を開いて以来、常会を年三回、臨時会を月一回をめやすとして開くようにしております。毎回、研究

以上のほか、全國の各地に地方調査員を委嘱し、その地の言語の実態調査を進めていきます。これも年報にゆずることにします。との

述べられております。

「この研究所の運営については、評議員会を設けて、その研究が教育界・学界その他社会各方面から孤立することを防ぐとともに、研究の研究計画、委託研究等について、活発な審議を行い、所長に対し、有益な助言をしております。

(斎藤幹事)

協議会その他

昭和二十四年三月三十一日、全國の國語学関係学者、國語教育・國語問題研究代表者等の參集を請い、國立國語研究所の事業についての協議会を開きました。

本年度は、この一回だけしか開くことができませんでしたが、この類の協議会は、あるいは問題により、あるいは専門分野によつて、今後ますますつづけていきたいと思つています。なお、もっとくつろいだ、問題もメンバーも自由にした、談話会のようなものを定期的におこないたいという考え方をもつています。それについては、熱心な御賛成をいただいている向きも少くありません。近いうちに、なんとか着手の方法を講じたいと思つています。

委託研究

研究所では、毎年の事業計画に基いて、必要な調査研究を所外の研究機関や個人に対して委託し、協力的に研究を前進させたいと思つています。

昭和二十三年度においては、標準語、方言に関する研究資料および國語教育、國語政策等に関する資料の作成を委託しました。

昭和二十四年度では、直接研究所のおこなう調査研究に関連する事項について、それぞれの専門家に委託しました。これらの委託事項については、追つて年報に、詳しく掲載する予定であります。

以上のほか、全國の各地に地方調査員を委嘱し、その地の言語の実態調査を進めています。これも年報にゆずることになります。この地方の言語の調査計画はその規模を次第にひろげて行きたいと思つています。

派遣教諭

開設当初から、全國都道府県派遣の内地留学教諭の希望者を迎え、一面には研究の便をはかり、一面には、全國各地における言語調査実施に備えるようにしたいと考えてきました。まだ設備その他において、受け入れ体制はできませんでしたけれども、開所以来、入所希望の向きが多く、熱心な方々は、あいている机を轉々として移つてもよいというような覚悟ですでに九名入所され、それぞれの研究室で研究を進めておられます。

氏名	勤務先	研究題目	期間
金井英雄	埼玉県七本木小学校	小学校の國語教育	昭二四、四から一カ年
青木千代吉	長野市立後町中学校	信州方言の國語学的研究	同、右
剣持隼一郎	柏崎高等学校	新潟方言と話し言葉の教育	昭二四、八から一月半
檜垣しも	高知縣大篠中學校	國語学習に関する研究法	昭二四、九から二月
虫明吉治郎	岡山縣立玉野第一高等学校	言語研究の在り方	昭二四、九から三月
前田実美	佐賀縣立伊万里高等学校	語法研究の方法	昭二四、九から三月
瀬戸由雄	大分縣立大分第二高等学校	高等学校における「作文指導と評価」の問題	昭二四、二月から一月

佐々木利男

北海道
琴似小学校

教育計画の展開における言語表現の立場

昭二四、一一か
ら四月

石垣福雄

函館市立高等学校

北海道方言の研究

昭二四、一一か
ら四月

浅井第一研究部長渡米

あとがき

一六

〔年報の発行までには、まだ半年かかります。いま、何を、どのようにしているかということのあらましをお知らせし、研究成果についての予報をも申し上げたいと思って、このおたよりをさしあげます。お氣づきのこと、細大となくお聞かせいただければ、しあわせに存じます。〕

第二研究部長浅井惠倫は、アメリカの招請によつて、アメリカにおける人文科学研究状況視察のため、昨年十二月十九日の船で渡米しました。主として言語学研究の状況を視察し、エール大学の言語学教室のゼミナールを指導して、三月末には帰任のはずであります。

〔まだ、頭のなかに描かれていることが多くて、実行にうつされたことが少いのをざんねんに存じます。しかし、日とともに、努力の跡もつき、共同の実もあがつておりますので、調査研究の成果についても、中間報告としての年報刊行までには、多少、まとまつた御報告ができるだらうと一同励みあつております。〕

66
Ko. 47

国立国語研究所



1002095071

184692



91
00
95071